

倫理学は ELSI といかにかかわりうるか——カントからのアプローチ——

平出喜代恵（関西大学）

カント『諸学部の争い——三部からなる (*Der Streit der Fakultäten in drei Abschnitten*)』には、「上級学部」と呼ばれる神学部・法学部・医学部と、「下級学部」と呼ばれる哲学部とのあいだに生じる争いが描き出されている。本提題でこの著作を取り上げるのは、学部にかんする上下の区分にカントがみてとった政治的意味が示唆的だからである。

学部のこの「上下」は、中世以来の伝統的呼称である。しかしカントはこれを別様に理解する。それによれば、政府には「国民に強力で最も持続的な影響力をもつ」という目的がある。そこで政府は大学に、この目的を達成するために役立つ「実務家」を育成せよと要請する。これを受けて三学部は、政府に裁可された教説を用いて学生を指導し、政府にとって望ましい人材へと作り上げていく。これら三学部が上級なのは、政府の利害関心に配慮せよという命令を受け入れたからにほかならない (VII18-19)。

これにたいして哲学部は、学問それ自体の利害関心しかもたない。したがって政府にとって有用でないので下級に位置づけられる。しかし、だからこそ哲学部は政府から自由でいられる。この自由を哲学部固有の利害関心に沿って発揮するとすれば、哲学部には上級学部の採用する教説の真偽を判定することが認められているはずだ。哲学部は「あらゆる学問の利害関心のために真理をつきとめ、これを上級学部が随意に使えるように差し出すのを自由にさせてもらうことしか望まない」 (VII28)。

カントの考えにしたがうなら、倫理学は「下級学部」の地位をとることになる。ところが、本シンポジウムの趣旨にあるとおり「倫理学も国家政策のもとに組み込まれ、国家政策をつつがなく推進するための知的資源の拠出を求められる時代がやってきた、と言えるかもしれない」。なるほど、ELSI の取り組みにおいて倫理学には、新しい科学技術やそれをめぐる政府の方針に「お墨付きを与える」役割が期待されているらしい。いまや倫理学は、政府という権威に服従し、その関心事をみずからの関心事とする「上級学部」にされようとしているわけである。これは、シンポジウム趣旨にいわれる「魂を売ること」にあたる。それはできない、倫理学の本質は知的誠実性なのだ、政治に巻き込まれるわけにはいかないと反抗すれば、倫理学は「お払い箱になる」かもしれない——それもできない。

本提題では、私が研究の中心に据えてきたカントに依拠しつつ、「魂を売る」か「お払い箱になる」か二者択一からの脱却を考えたい。手がかりとするのは、『諸学部の争い——三部からなる』に示された上級学部にたいして下級学部のもつ地位のほか、「啓蒙とはなにか、という問いへの答え (Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung?)」で説かれた理性使用 2 つのありようである。

Kants Gesammelte Schriften. Hrsg. von der Königlichen Preußischen Akademie der Wissenschaften und Nachfolgern, Bd. VII, Berlin, 1917